

# 展示のご案内

## 東洋に目を向けて：日本からの影響

2016年10月13日から2017年2月26日まで

1854年にマシュー・カルブレイス・ペリー総督はアメリカ合衆国と日本との間で貿易を開始する協定を締結しました。それまでは日本は他国と一切の鎖国政策をしいていました。ペリー総督は恐らくこの協定のその後の壮大な効果を想定していなかったでしょう。1年もしない内にフランスの画家フェリックス・ブラックモンが北斎の木版画を「発見」し、パリの美術界に紹介しました。この影響は素早く亘り、コスコブの画家ジョン・ヘンリー・トワックマン、J. アルデン・ウィアー、チャイルド・ハッサムらの目にも注目されました。日本の美術と文化はロンドン万国博覧会（1862年）、パリ万博（1867年）とウィーン万博（1873年）で紹介され多大な色彩を添え、ヨーロッパ中に日本の全てを魅了しました。



江藤源次郎（1867～1924年）無題「習字を学ぶお娘さん」、グワッシュ水彩画と鉛筆による 1914年作、2008年4月上住升氏を偲ぶファンドの寄贈によりグリニッチ歴史協会美術館購入

南北戦争によりアメリカへの日本の芸術と文化の紹介が阻まれて遅れましたが、1873年のフィラデルフィア万国博覧会並びに1893年のシカゴ万国博覧会における紹介により「エキゾチック」な日本の美は熱狂的に受け入れられました。

日本画、木版画、写真、彫刻、陶器、織物を通して**東洋へ目を向け**ては特にコスコブ・アート・コロニーに焦点を当てながら19世紀終末から20世紀初頭における日本の芸術と文化の影響を見聞します。ニューヨークにあるアート・スチューデント・リーグ美術学校のジョン・トワックマンに師事しそしてホーリーハウスにおいて1895年から1901年の毎年の一期間を過ごした江藤源次郎がどのような貢献をもたらしたかは別のギャラリーに展示した彼の孫娘から最近の寄贈ありました遺作品を特別に紹介します。